

〈本文〉

五番

左 持 網代

子をつれて夜の網代に簀狭し

心水

右

網代木のゆるきやみぬる氷哉

不角

網代の床に子をつれたる作意
めづらかにしてやさし。

右又あしろの杭の氷にとどて

寒さいやましたるけしき

左右感心わきかたし

〈現代語訳〉

左 持 網代

子供を連れて、夜の網代の番をする。凍てつく寒さに、二人で一つの簀にくるまるが、何とも狭いことだ。

* 「網代」は冬の季題。川の中に網を引く形に杭を打ち、先端の簀や筥うけの中に魚を誘い込んで取る仕掛けをいう。宇治川や田上川で氷魚（鮎の稚魚）をとるのが著名で、和歌でもそれらを詠むことが多い。『初学和歌式』に、

あじろは、氷魚ひまといふ物をとらん為に、あじろといふものをかけて、川下よりのぼるひをの其中に入れてぬやうにしつらふ也。あじろの床といふはあじろをもる人のゝぼりてゐる床也。あじろもる人をあじろもりとも、あじろ人ともいふ（中略）あじろ木とは、あじろをうつ木也。かぢりをよむは、かぢり火にてひをのよるをみる也。又説かぢりの水にうつれる影につきてひをのぼるともいふ。あじろの名所は、宇治川、田上川、たなかみ吉野川によめり。其外はなし。氷魚はちいさきうをの白き物也。よつて水の氷にまがへ、又月影にまがふよしをもよめり。

という。心水の句は、夜の網代守を詠んだものである。右の記述にもあるように、「網代」は冬の景物であり、また氷魚を捕ることから、「寒き夜」が詠まれ、特に氷魚を月光になぞらえて、夜の景を詠む歌も多い。網代守の寒さを詠んだ歌も若干あるが、その簀を詠んだ歌はなく、子供を詠み込んだものも、『正徹千首』の、

かがり火によりてぞあたる里の子の網代もる男を知る人にして

歌があるくらいで、珍しい。心水の句は、網代守の簀、子供といった題材の特

異性に加え、和歌の「寒き夜」を「寒」という言葉を使わず、子連れで寝にくるまる行為によって表現した点が新しい。「寝狭し」という表現が、具体的に寒さと、そして親子のぬくもりや情愛を表している。

右

川波に揺れていた網代木の動きが止まった。あまりの寒さに凍りついたとみえる。

* 「網代木」の揺らぎに着目した歌は少なく、

『松下集』三六番自家歌合 右 網代群遊

よる浪はただこゆるぎぞ網代木にさかなもとむるうちの郷人

『夫木和歌抄』

光俊朝臣

さらぬだになみもてゆるするあじろ木にながしかけたる宇治の柴舟

の二首を見出すに留まった。「氷」は「網代」によく詠まれる題材で、『類船集』でも付合語になっている。その場合、『初学和歌式』にあるように「氷魚」を指すこともあれば、次の『風雅和歌集』の歌のように、氷が網代に寄る冬の寒々しい景を詠むこともある。

文保三年、後宇多院へたてまつりける百首歌の中に 前大納言為世

風さゆるうぢのあじろ木せをはやみ水も浪もくだけてぞよる

ただし、網代木が凍りついて動きが止まる、という歌はなく、和歌にはない観点から「氷」を用いて網代の寒さを詠んでいる。

なお、本文は「ゆるきやみぬに」とも読めるが、その場合は、網代木の動きが止んだことに不審を抱き、見ると凍りついていた、という「発見」の意味が加わることになる。

〈判詞〉

網代の床に子供を連れてくるという一句の作意は、目新しく、情愛が感じられる。右句は、また、網代の杭が氷にとざされて、寒さがいっそう増した様子を詠んだのはすばらしい。左右の句、ともに心に深く感じて勝敗がつけられない。

* 「めづらか」は、例えば、『貝おほひ』一番「左の発句は……うどんげよりもめづらかに覚え侍る」の用例などからも、目新しい、珍しい、の意味。左句の題材についての的確な評である。一方、「やさし」は歌合・句合の用語としては、優美・風雅の意味で用いるのが普通だが、ここでは、親子連れの網代守について、情愛が深い、といっているのだろう。歌合の評語として頻出する「やさし」を、わざと異なる意味で用いた面白さがある。

右句については、網代が氷に閉ざされる、という新しい詠み方に着目している。ともに和歌とは異なる視点から「網代」の寒さを表現したことに対して評価し、「持」となった。